

佳作

ある朝鮮人陶工の半生

長迫 英倫

登場人物

張献功（20）  
（30）  
（65）

妻（55）

息子（30）

一官（40）

三官（40）

弟子1（20）

弟子2（17）

尚豊王（40）

あらすじ

張献功は慶尚道のある地方で太守の息子として生まれた。しかし、幼少時に文禄慶長の役があり、俘虜として薩摩に連行された。

その後、尚寧王に請われて、安一官と安三官とともに陶工として琉球にやってきたが、土質の違いに苦しみ、思ったような器を作ることができず、一官と三官は朝鮮へと帰ってしまう。それでも献功が琉球にとどまったのは、彼の出自が職人ではなかったからである。彼は、器づくりを通じて自己のアイデンティティーを作り上げていった。そして、琉球で自分の一家をつくりあげた。

晩年、こうしたいが自己中心的なあやまちではなかったのかと思

い、苛まれていたが、死に際の枕元で妻子と意思を通わせて、おだやかな最期を迎えることができたのである。

（臨終を迎えた献功が床にふせている。その両脇に、心配そうに妻と息子が座り、献功の顔をのぞきこんでいる。）

献功 ……。（かすれた、小さな声で、ささやく。）

子 父上。何かおっしゃいましたか。

献功 妻は居るか。

妻 はい。ここに。

献功 私のことを恨んでいるか。

妻 いいえ。なぜ、そのようなことを。

献功 何十年も経ったとはいえ、異国の職人のもとに無理に嫁がされて、家の中でも外でも苦勞したのであろう。それなりに高い身分

に生まれたのにな。

妻 そのような昔のことは、もう忘れました。

献功 そんなはずはあるまい。私は、さらにそれ以前の朝鮮のできごとを昨日のことにように覚えておる。

妻 それは、受けた仕打ちが違いすぎます。それに、あなたは私にやさしくしてくれました。たしかに、最初はいろいろと苦勞いたしましたが、子にも恵まれ、これといった不自由もなく暮らしを立てることが出来ました。

献功 そうか。私は……。〈しばらく遠くを見つめる。〉私は、そもそも太守の子であった。

妻 はじめて聞きます。

子 本当ですか？

献功 今まで、言えなかった。しかし、決して職人という身分を恥じたからではない。私は、この琉球の地で、職人として生まれ変

妻 わったと思っっている。（だんだんと、口調もしつかりしてくる。）  
でも、なぜ今になつて、おっしゃつたのですか。

献功 うむ。家族には、せめて家族にだけは、私のすべてを知つておいてもらいたかつた。それが、人間、張献功の生きた証と思つたのだ。

子 お教えください。父上は、どのような人生を歩まれたのですか。

献功 私は生まれながらの職人ではない。慶州の近くの街で、太守の子として生まれ育てられた。しかし、文禄慶長の役の折、薩摩に捕虜として連れてこられた。

子 それは、聞いております。

献功 薩摩には南原から連れてこられた陶工たちが多かつた。我ら慶尚道の人間は彼らとはそりが合わなかつた。それゆえ、一官や三官とともに、琉球へ渡つてきたのだ。

妻 太守の子がなにゆえ陶工などに身をやつたのですか。

献功 朝鮮から捕虜として日本に連れて来られた者の中には、藩主から儒者として厚く遇された者もあると聞く。しかし、私は幼すぎた。太守の子とはいえ、人に儒学を講じるほど、学問を身につけてはいなかった。朝鮮人として、さげすまれずに生きていくには、周りの日本人よりも高い技術を身につけるしかなかったのだ。薩摩の地では、一官と三官が父親がわりをつとめて育ててくれた。そもそも、彼らの父は、私の父が治めていた地方の官窯の長であったのだ。

子 そうでしたか：

（時代がさかのぼり、一官、三官と「一六」と名乗っていた献功が、屋内で話し合っている。）

一官 我々も、運が良いのやら、悪いのやら。

三官 そうだな。生まれた土地から薩摩、そしてさらに琉球に連れてこられたが、琉球では薩摩と違って、国王から厚く遇されてきた。

一官 そのうえ、このたび、船を出すから帰国したければ、してもよいとまで言ってくれさせた。

献功 え?!（大声を出す。）私は、薩摩に帰るものと思っております。

一官 それは表向きの話だ。もともと、琉球の地は、土が異なり、思ったような焼き物ができなかった。

三官 そこで、我々は、薩摩に帰してくれるように、再三、王に頼んでいたのだ。

一官 うむ。琉球は気候も温暖、人々の気質もおだやかで、とてもよいところだ。しかし、我々はやはり職人だ。自分自身が納得のゆく、よい焼き物をつくりたいという欲求は、如何ともし難い。

三官 琉球の土では、我々の技は活かしきれないからな。

一官 そんな思いを国王が理解してくださり、薩摩に帰るくらいなら、いつそ朝鮮に帰ればよいと言って下さった。

三官 もちろん。我々を勝手に朝鮮に帰したとあつては、後々、薩摩や幕府からどんなお咎めがあるかもしれぬ。そこで、我々は明への進貢船に隠れて乗ることになった。

一官 うむ。琉球王は、ご自身が苦勞なさっただけのことはあつて、とても心優しいお方だ。周りには、我らは琉球の土に失望して、薩摩に帰ったことにしてくださるといふ。

三官 ようやくこの器づくりの腕を、朝鮮の土でいかすことができる。自らの技を、土のまったく違う異国で、無駄に終わらせてしまふのかと思うと、生きる甲斐もないとふさいでいたのだが……。

一官 うむ。これまでの苦勞も、むしろよい経験となるだろうな。

三官 そうだな。思うようにならぬ土を相手に、工夫に工夫を重ね、



苦勞して琉球の焼き物をここまでにしたのだ。朝鮮の土があれば、これまでにない焼き物を作ることができるぞ。

一官 わが身ひとつで帰ったとしても、残りの人生を生きていくのは難しくないだろう。いやいや、それどころか、この身そのものが、二本の腕が、そして十本の指が、宝として皆から称賛されるであらう。

三官 それでは、出港までに帰り支度を終えなければ。

一官 とところで、お前は どうする。朝鮮に帰っても、おそらく太守の地位にはつけない。それどころか、裏切り者として処罰されるかもしれないぞ。

三官 そうだな。いっそ、我らのどちらかの子供として帰るか。

一官 そうだな。薩摩でもらった子ということにすれば、周りも疑うことはないだろう。

三官 では、お前も心配することはない。早く帰り支度にとりかかり

なさい。

一六 申し訳ございません…。

一官 どうした。

一六 …。

三官 何か言いにくいことでもあるか。

一六 私は、この地にとどまりたいと考えております。

一官 何！？（とがめだてるような声。）

三官 どういうことだ。好きな女子でもおるのか？

一六 いえいえ。そういうわけではありません。

一官 ならば、どうして。

一六 私は、薩摩や琉球でなら、陶工として生きていけます。しかし、

朝鮮で、陶工として生きていけるか、自信がないのです。

三官 どういうことだ？陶工としての腕前は、まだまだ一人前とは言

えぬが、そこら辺の者に負けぬほどにはなっているぞ。

一官 その通りだ。我らが教えたのだからな。

一六 いえ。自分の腕が信用ならんとか、お二人の教えが満足いかな  
いとか、そういうことではないのです。（少し間をおいて。）も  
しも朝鮮に戻ったら、わたしは、自分が太守の子であったこと  
を、ことごとくに思い出すのではないか。そしてその都度、自分  
が身をやつさねばならなくなった恨みを、日本や琉球に抱くの  
ではないか。それが心配なのです。私は、そのような後ろ向き  
の人生を送りたくはないのです。薩摩や琉球で過ごした人生  
を、自ら無駄なものだと思ってしまうようなことだけはしたく  
ないのです。しかし、私は自分がそれほど強い人間だとは思え  
ないのです。

三官 しかし、今お前が言ったことこそ、われら朝鮮民族のほこる「恨  
（ハン）」ではないか。そのような人生の悲哀を背負っているか  
らこそ、物づくりに深みが増し、作られた物が魂をもつのでは

ないか。

（一官はしばらく考え込んでいる。）

三官 （二官の方を向いて） お前から、何とか言ってみてやれ。

一官 （しばらく沈黙した後） お前が琉球へきて「一六」と名乗り始めた時に、やめさせておけばよかったのかもしれない。

一六 お気づきだったのですか？

三官 うん？ どういうことだ？

一官 琉球の言葉で「いちろく（一郎子）」とは、王や太陽を意味する言葉であろう。

三官 何？ 本当か？

一六 …。（うつむいたまま。）

一官 まさかとは思っていたが。お前は太守の子という自尊心を捨て切れなかったのだな。我々のことも、ずっと下僕とっておつ

たのだな…。

一六 そのようなことは…。

一官 ないとも?!

一六 お二人の恩を忘れたことはありません。本当の父と思って生きてまいりました。これは、嘘偽りのない私の心です。ただ、私は恐ろしかったのです。私は薩摩に来たとき、まだ十歳にもなっておりませんでした。異国の地にあっても自らの出自を忘れまいと、私という存在を失うまいと、ただそれだけの思いから一六と名乗りました。どこで、どのような境遇に陥ろうとも、自らの出自を忘れず、朝鮮人であることを誇りに生きていこうと思っておったのです。お二人には感謝こそすれ、見下したことなど一度もありません。

一官 では、なぜ朝鮮に帰らないのだ。私たちの子として生きていくのが嫌でないのなら。

一六 私は、（しばらく沈黙）やはり恐ろしいのです。高い技術を誇

る朝鮮で、陶工として認められるのか、という不安もあります。それに、いつか、どこかで昔の私を知る人に出会い、出自がばれてしまうのではないかという恐れもあります。そうになったら、「どの面下げて帰ってきた」と人々からそしりを受け、お上からは何かしら罰を受けるのではないか。そして、正直に言えば、私が一番おそれているのは、誰も私のことなど覚えていないのではないかということなのです。文禄慶長の役の折に太守の子がさらわれた、などということを誰も覚えていないのではないか。私は、本当に、太守の子だったのでしょうか？朝鮮で生まれ育ったのでしょうか？（頭を抱え、うずくまる。）

三官

なるほど。分からないでもない。お前は幼すぎた。何も覚えていないのであろう。確かに、身分も名前も、そして出自すらも変えてしまったお前には、「帰る」という言葉はあてはまらない。

新たな土地で再び、別の人生を生きなければならぬ、ということなのだ。

一官 うむ。生まれ育った土地で、別人として生きていかなければならないというのは、かえってつらいことかもしれない。ならば仕方がない。お前は、この琉球の地で今のまま生きていくことだ。

陶工として生きていくには、十分な技術を身に着けたのだから。一六 ありがとうございます。お二人のご恩は決して忘れません。そして、無事のご帰国を心からお祈りしております。

（琉球で、陶工として、工房の主として生活を送る張献功。ろくろの前に座る弟子二人の前に立ちほだかる。）

献功 まだ分からののか。

弟子1 何が悪いのですか。私は、もつともつと自らの技に磨きをか  
けたいのです。

献功 お前の器には、その心が焼き付けられておる。自らの技を誇る  
いやしい心が。

弟子1 いやしい……。あんまりなお言葉ではありませんか！

献功 …。苦々しい顔で弟子と、弟子の前のろくろの上にある器を

眺める。）

弟子1 今までお世話になりましたが、別の窯に移りたいと存じます。

献功 うむ。

弟子2 よいのですか。兄弟子の技はこのあたりでも評判なのですよ。

献功 お前まで…。（失望の色を浮かべて、弟子2を振り返る。）

弟子2 私も、師匠のお言葉がよく分からないのです。

献功 何度も申してきた通り、陶工に技など不要なのだ。

弟子2 しかし、世の中では、誰その焼いた器が良いと申して、そ



れで器の値が決まるではありませんか。師匠もその中のお一人ではございませんか。

献功 そのような名声や富は、それ自体を目指すべきものではない。

我ら陶工は、ただひたすら、良い器を作っておればよいのだ。

弟子1 ですから、私は、良い器を作るための技を磨こうとしておるのです。

献功 お前は技を勘違いしておる。

弟子2 どういうことですか。

献功 器とは、うつろであることに意味がある。

弟子1 そのお話は、何度もうかがっております。

献功 器の中に、何をどのように入れるのか、どのような場面で、誰のために器を使うか。それは、使う人が決める。お前の器は、器が語りすぎる。

弟子1 器が語る…

献功 器は無口でなければならぬ。器は無でなければならぬ。そのために、作り手が空っぽの器でなければならぬ。

弟子2 空っぽの器…。

献功 簡単なことではない。

弟子1 ですから、私は、ただひたすら無心に自らの技を磨いております。

献功 それは屁理屈だ。今、くしくもその口で「自らの技」と申したな。

弟子1 いけませんか。

献功 技は、お前の技ではない。

弟子1 なんと?!

弟子2 では、誰の？

献功 誰のものでもない。技は、ただ技である。

弟子1 さっぱり分かりません。

献功 空っぽの器としての己を満たすことができるのは、己自身では

ない。器は勝手に満ちるのだ。

弟子2 勝手に……。では、鍛錬などいらぬではありませんか。

献功 それは違う。ただ見ることに、それが鍛錬なのだ。

弟子1 見る？何を見るのですか？

献功 土の表情を、そして器を使う人の表情を。そしてまた、先人たちが作ってきた良い器を。それから、何よりも、この琉球の美しく豊かな国土を。そうすれば、器としての己の中から、技は勝手に溢れ出てくる。

弟子1 まだ良くは分かりません。しかし、師匠が今おっしゃったものを、とりわけ使う人の表情を見てこなかったことは認めます。

献功 そこに気づけば、それでよい。とにかく、器にまつわるいろいろなものを見ることから始めなさい。そうすれば、己という器が小さなものに見えてくる。もどかしく、苦しくなる。しかし、

それを乗り越えれば、己は、ひとまわり大きな器になるはずだ。  
そのとき、技もまた磨かれるのだ。器づくりは、その繰り返しだ。  
それが我ら陶工の人生すべてなのだ。

弟子1 はい。

弟子2 はい。（ふたり、声をそろえて。）

（時が経ち、献功は首里の王府に召し出される。）

尚豊王 久しぶりだな、献功。

献功 はい。

尚豊王 私が薩摩から招請した陶工のうち、お前だけが琉球にとどまり、この琉球に新たな焼き物をひろめてくれた。いまさらではあるが、礼を言うぞ。

献功 もつたいないお言葉です。

尚豊王 ついては、お前に姓をあたえ、士分として遇するよう、皆に

通達したい。

献功 ありがたいお言葉ですが、そのようなお心遣いは無用です。

尚豊王 何?!

献功 今までずっと黙っておりましたが、私は、生まれながらの陶工ではありません。私は、朝鮮では太守の子だったのです。

尚豊王 なんだと?

献功 朝鮮で貴族の子として生まれ、薩摩と琉球では陶工として生きてまいりました。また身分を変えたのでは、張献功という人間がいつたい誰なのか、私にも分からなくなってしまう。

尚豊王 うむ。しかし、身分を変えようが、張献功は張献功ではないか。献功 それはそうかもしれませんが、おそらく、私は恐いのです。

尚豊王 恐い?

献功 はい。私は生来、恐がりですから。今になって、十分に变えた

のでは、琉球での自分が幻になってしまおうのではないかと、恐いのです。

尚豊王　ふむ。（考え込む。）

献功　以前、王は、一官や三官、それにわたくしに朝鮮への帰国をお許しくださいました。

尚豊王　そうだな。そのとき、お前だけが琉球に残ってくれた。だからこそ、その労に報いたいのだ。

献功　そのお気持ちとはとてもうれしいのですが、そのお言葉だけで十分です。私が琉球に残ったのは、陶工張献功として生きていくと心に決めたからなのです。士分になるということは、そのときの自分を欺くことになります。いや、いままでの琉球での私の人生が無いものになってしまうのです。琉球の言葉で王子を意味する「いちろく」という名を用いておりましたが、それもそのときにあらためました。

尚豊王　なんと?! 「いちろく」とは、そのような意味で名乗っていたのか。

献功　はい。もしもお咎めがあるのでしたら、どのようにでも。

尚豊王　今さらとがめだてなどせぬが、だとすれば、なおさら士分になつた方がよいのではないか？

献功　いえ。ですから、そのような心は捨てたのです。そして、不思議なことに、その気持ちを捨てた時から、わたしはようやく自分の器に誇りが持てるようになったのです。

尚豊王　そうか。

献功　たかが身分、されど身分です。士分にしていただいたら、わたしはこれまで通りの器すら作れなくなってしまうでしょう。一陶工として、誇りをもって生きているからこそ、今の器にたどりつくことができたのです。

尚豊王　そうか。では、もう何も言うまい。しかし、せめて琉球の姓

を名乗ってはどうか。いま、お前が言った通り、琉球の陶工として生きてきたのなら、そしてまた、これからも生きてゆくのなら、琉球の姓を名乗りなさい。そして、妻をめとりなさい。

献功 姓と妻と…。

尚豊王 うむ。私は琉球の王として、お前に一人の琉球人として誇りをもつて生きていつてほしい。朝鮮人として生まれたお前がそのような姿を見せてくれれば、琉球の民もまたおのずと誇りをもつて生きていけるであろう。これは、褒美ではない。私からのお願いだな。

献功 重ね重ねもつたいたいお言葉です。そこまでおっしゃっていただけるのでしたら、姓を名乗り、妻をめとり、一家を立てて生きていきます。

尚豊王 うむ。琉球人として生きていく決心をしてくれたのだな。こ



れからも、琉球の焼き物の発展に尽くしてくれよ。

献功 ははっ。（平伏する。）

（時は、献功の臨終の場に戻る。献功と妻と子がおだやかに語らっている。）

妻 私は、あなたが自ら土分を断った「変わり者の朝鮮人」だとし

か聞いておりませんでした。

献功 そうか。「変わり者の朝鮮人」か。（苦笑を浮かべる。）

妻 大変な人生でしたね。

献功 人はそれぞれ大変な人生を歩んでいる。私だけではない。

妻 しかし、朝鮮の貴族が、琉球の陶工になるなど…。

子 父上の覚悟、私もしっかりと受け継いでゆきます。

献功 覚悟か…。

子 はい。

献功 私にはそんなものなど無かったよ。

子 なんと？

献功 私は、ただ、私でいたかっただけなのだ。

妻 また、難しいことをおっしゃる。

献功 すまぬ。だが、それが本当だ。薩摩に渡ったとき、私は太守の

子という身分を失っただけではない。「朝鮮人」とさげすまれた。なにゆえ、朝鮮人がさげすむ理由になるのか。朝鮮は戦に負けたわけではない。勝手に攻めてきた日本の軍勢を追い返したし、国も滅んでなどいない。それなのに、捕虜として連れてこられた私はさげすまれる。もちろん、表向きは、上等な器をもたらした者として敬われた。一官や三官をはじめ、朝鮮からきた陶工は登り窯の技術を伝えたからな。しかし、周りの日本人たちは、心の底で「朝鮮人」とさげすんでいた。だまっていっても、心は伝わるものだ。

妻 それは、「やつかみ」と呼ばれるものでしょう。あなたたちの

ことをさげすんでいたのではなく、恐れていたのではないですか。

献功 そうかも知れぬ。異質なものは、本当の意味では受け入れられ

ないのだ。

妻 琉球でも、そのようにお苦しみでしたか。

献功 いや。自ら「いちろく」などと名乗っていたときは苦しかった。

しかし、その名を捨て、朝鮮人陶工、張献功として生きてゆく  
うと決めてから、不思議に楽になった。それは、琉球の人々が、  
わたしと同じ苦しみを背負っているからかもしれない。

子 琉球も…。

献功 うむ。琉球も薩摩に、またその後ろに控えている徳川に屈した。

同じような境遇の私を、琉球の人々は温かく迎え入れてくれた  
よ。

妻　　そうでしたか。でも、私が嫁いでくるまで、あなたはずっとお一人でした。

献功　それは言い過ぎだ。何人もの人間が弟子入り志願してきたよ。

（薄く笑いを浮かべる。）

子　　父上は、琉球の民になってよかったとお考えですか。

献功　当たり前だ。私は、琉球が好きだ。そして、それは琉球がした

たかに生きているからだ。

妻　　したたかですか。

献功　したたかであろう。薩摩を通じて徳川とよしみを通じながら、

明とのつながりもこれまでと変わらぬ。

子　　それは、薩摩や徳川が望んだからではないですか。

献功　薩摩や徳川から命じられたからだとも。

子　　違いますか。あるいは、彼らが許したからでは？

献功　では、なぜ彼らは許した。

子 明が大国だからでしょう。

献功 琉球を薩摩や徳川が併合したら、明との戦になるからか。

子 はい。

献功 では、なぜ、明は、今は来ない。薩摩が琉球に攻め込んだことは、

明も知っているはずではないか。

子 それは明もまた、薩摩や徳川との戦を恐れているからでしょう。

献功 その通りだ。日本も明も、互いに戦をしようなどとは思っては

おらぬ。琉球の人々は、そのことを知っていたのだ。琉球の人々は、はるか昔から、大陸の国々と独自に交易をして、広い視野を持ち、いろいろなものを、そしてことを、しっかりと見ていたのだ。だからこそ、知ることができたのだ。琉球が薩摩にあるいは日本になったとしても、何も変わらぬことを。だから、あたら血を流すことをしなかったのだ。

子 しかし、それではなぜ、薩摩との戦を避けられなかったのです

か？

献功 そこよ。我らは、常に二つの見方を同時にしなければならぬ。

子 二つの見方？

献功 うむ。琉球の人々は広い視野をもつてはいた。

子 はい。

献功 しかし、深い洞察力をもつてはいなかったのだ。

子 深い洞察力ですか？

献功 そうだ。薩摩は再三、薩摩の印判を持たない船との交易をやめるよう申し入れてきておつた。

子 聞いております。しかし、琉球では交易相手を薩摩一国に絞ることは危ないと判断したとか。

献功 そこよ。だが、結果はどうなった？薩摩は、日向や大隅を従え、また関が原では敗軍になったとはいえ、存分な働きを見せ、徳川に一目置かれる存在となった。

子 はい。

献功 そのうえ、今度は徳川が、薩摩を通じて謝恩使の派遣を要請してきた。

子 琉球は、明とは冊封関係にあるものの、日本とは対等であり、その立場を堅持するために断固断つたと聞いております。

献功 立場を変えてみなさい。

子 は？

献功 徳川は、天下人になった。しかし、朝鮮や明とは断行したままだ。

子 はい。

献功 そのような時に、琉球の船が陸奥に漂着した。家康は、乗っていた琉球人を必ず無事に琉球に帰すよう、薩摩に厳命したそうだ。家康は、自らが日本全土をしっかりと掌握していることを示そうとした。徳川が、日本の内にあつては「天下分け目の戦」が本当の意味で終わったことを示すためにも、また、外にあつ

ては、明との関係を修復するためにも、琉球は必要なそして重要な存在であったのだ。

子 はい。しかし、では、どうすればよかったですか？

献功 したたかであればよかったですのだ。

子 したたかで…。

献功 そう。下々の者の方がよほどしたたかだな。身分が高くなると、意味もなく理想を追い求めたくなる。邪魔な自尊心を持ちたくなる。日本と琉球の関係は、どちらが上だろうが下だろうが、そのようなことはどうでもよいことだ。

子 しかし、誇りも必要ではありませんか。

献功 お前の言うとおりだ。しかし、誇りとはどこにあるものなのだ？どこ、と言われましても。

献功 一人一人の心の中にあるのだよ。

子 それはそうですが、国を司る者としては、民に見える形で示さ



ねばならぬこともあるでしょう。

献功 だからこそ、したたかでなければならぬのだ。琉球は、海によって、大陸からも日本からも、遠く隔てられている。外からは見えぬ形で、内にいる民にだけ見えるように、誇っていればよかったのだ。徳川に恩を売っておればよかったのだ。名を捨てても、実が取れたものを。それなのに、理屈をこねて、意地を張って、名も実も失ってしまった。私の生まれた朝鮮と似ている。

子 しかし、朝鮮はいまだに国として残っているではありませんか。いずれはなくなるであろう。あのように名にこだわってばかりいては。

妻 何やら、難しいお話になってきましたね。（やさしく微笑む。）  
献功 （子供に向かつて）よく覚えておきなさい。私は、太守の子と

しての誇りを捨てた。しかし、朝鮮人張献功の誇りを捨てたわけではない。それは、私の作る器の中に満ちているはずだ。

子 登り窯や釉薬を通してですね。

献功 違う。私自身を通してだ。私以外の誰も、私の器を作ることができないということを通してだ。

子 なるほど。

献功 分かるか？今、私が焼く器には、私のすべてが入っている。朝鮮で太守の子として生まれ、捕虜として薩摩にゆき、陶工として育てられ、そして琉球王に請われて琉球の地にやってきた私の人生の中で、何が欠けても、今の器にはならないだろう。すべての瞬間、瞬間が私の器には必要なのだ。

子 分かりました。私も、一瞬たりともおろそかにせず、器づくりに精進いたします。

献功 それから、二つの見方を忘れるな。広く、深く、ただひたすらに見なければならぬ。

子 はい。（大きくうなずく。）

献功 うむ。（妻の方に向き直る。）ところで、お前は本当に、私を恨

んではないのか。一瞬たりとも、恨んだことはないのか。

妻 はい。私も、あなたと同じです。

献功 うむ？

妻 他人からは、朝鮮人陶工が寂しがって国に帰ってしまったぬように結婚させられたのだとか、有名な朝鮮人陶工のもとに嫁いで金目当てではないかとか、聞こえよがしに言われたこともありました。

献功 そうであろう。

妻 しかし、私は、自分からあなたの妻になると言ったのです。

献功 なんと？それは…。

妻 はじめて言いました。

献功 なぜ？

妻 女の方から、好きだと言うのは…。（恥ずかしそうに、うつむく。）

献功 いや。そうではない。なぜ、私のもとにすすんで嫁いできたのかと聞いているのだ。

妻 あなたの器を使ったことがあったからです。

献功 なんと?!

妻 私は、実家で、あなたの器を使っておりました。あなたの器には、何とも言えぬ温かさがありました。決して、名品というわけではありません。しかし、他では手に入らぬものだと感じました。毎日、普通に食べるものや飲むものが、おいしく感じられるのです。不思議に思つて父に尋ねると、朝鮮人陶工の焼いたものだと言われました。

献功 そうであったか。

妻 国王が、その朝鮮人陶工の妻を探していると聞いたとき、私は是非にと父に願い出ました。しかし、父も、また兄も、強く反対いたしました。

献功 それは、当然であろう。

妻 でも、私は、それができないのなら、どこへも嫁には行かぬ、  
と言ひ張つたのです。

献功 それで？

妻 時間はかかりましたが、父も兄も、折れたからこそ、今、私は  
ここにいます。

献功 なぜ、そのようなことを今まで黙っていた。

妻 父と兄との約束でした。

献功 ほう。

妻 父は言いました。女の方から嫁に行きたいなどと言うのははし  
たない。それもまた、有名な朝鮮人陶工のもとへとなると、金  
や名声に目がくらんだとのそしりを受けるかもしれぬ。だから、  
国王が悩んでおられるのを見るに見かねて、国王に対して忠義  
を尽くすために、すすんで娘を差し出したことにする。また、

嫁いだ後は、金品のやり取りは絶対にしない、と。

献功 なるほど。それで、たまに実家に戻るときにも、みやげはおろか、わたしの器さえ持って行ってくれなかったのだな。

妻 長年の無礼をお許しください。

献功 いや。私は、お前やお父上が、ずっと私を恨んでいて、だから、私と関わるものを実家に置きたくはないのだろう、と思っただ。

妻 申し訳ございません。気づくべきでした。あなたを苦しめることになっていたのですね。

献功 なに。気にすることはない。今の話を聞いて、私は安心したよ。

妻 はい？

献功 やはり、琉球の人々はしたたかだ。

妻 まあ。

（献功と妻、大いに笑う。）

献功 ああ。よく笑った。人生で残しておいた分の笑いが、出尽くしてしまつたようだ。

妻 寂しいことを言わないでください。

献功 いや、疲れたよ。しかし、おもしろく幸せな人生であつたな。

妻 私もです。

子 私は、父と母を誇りに思います。

献功 うむ。ありがとう。お前は、琉球に住む朝鮮人陶工張献功の息子なのだ。そのことは胸に刻んでおきなさい。しかし、その誇りが、器造りの邪魔にならぬようにな。

子 肝に銘じます。

献功 長い長い旅であつたが、そろそろ休みたくなつてきた。

（妻と子、すすり泣く。）

献功 泣くことはない。ようやく、落ち着く場所が決まったのだ。それには、琉球では、あの世は雨どいの下にある、などと申すではないか。私はもう、ずっと以前から琉球の民だよ。私の魂が朝鮮に帰ることはない。いつでも会える。では、夢の続きを見る  
としよう。

（永遠の眠りにつく。その顔は本当に眠っているかのように穏やかであり、妻も子も嘆き悲しむのではなく、そっと寝かせておくかのよう  
にいつまでも見守っている）